

『和刻本中国古逸書叢刊』前言

金程宇 撰 田中京・富嘉吟 訳

和刻本は中国古籍の域外の伝本の重要な一種類である。東アジアの漢文化圏の中で、和刻本は朝鮮本やベトナム本と並び称され、中国古籍の域外の伝播の絢麗な光景を共に構成している。

日本で刊刻された中国の古籍は、中国では様々な呼び名があり、例えば「日本刊本」、「日本本」、「東洋本」、「和刻本」などがある。その中でも和刻本は、近年中国国内で最もよく使われる総称である。しかしながら、この一つの名称が包含する範囲は、日本の学界での見解において必ずしも統一されていない。私の知るところでは、日本の国文学専門の研究者は、多くは広義の和刻本としての見解を採用している。和刻本は百万塔陀羅尼經、五山版、古活字版、江戸刊本、近世木活字本などを含む。中村幸彦の「和刻本」(『中国文化叢書』第九卷『日本漢学』、大修館書店、一九六八年)の例がそうである(『日本古典籍書誌学辞典』(井上宗雄など、岩波書店、一九九九年)「和刻本」の条もまた中村氏の見解を採用している)。しかし日本の漢籍版本の研究者は、往々にして狭義の和刻本の定義を採用し、つまり和刻本は主に江戸の刊本を指すとしており、例えば長沢規矩也『和刻本漢籍分類目録』

(汲古書院、一九七六年初版、二〇〇六年増補補正版)は、この定義を採用して目録が作られており、日本の古刊本や古活字本を含んでいない。広義の和刻本の定義によった『中国館蔵和刻本漢籍書目』(杭州大学出版社、一九九五年)の出版のちに比較的広く使われており、中国国内ではこの呼称が多く使用されているため、本叢刊でもこの広義の和刻本の定義を採用し、まず和刻本について説明することにする。和刻本が結局のところどれだけあるのかについては、未だはっきりとした統計はない。上述の『和刻本漢籍分類目録』が著録する江戸の刻本(部分的に古鈔本影印本を含む)だけでも、多く五千種あまりにも及ぶ。もし古刊本・古活字本を含め、さらに膨大な量の仏教文献や医学書も含めるとすれば、その数はきっと驚くべきものになるだろう。仏教書で言うと、『天海蔵』(寛永寺蔵とも呼ばれる)は、活字印本仏典千四百五十三部を収録しており(『思溪蔵』の翻印)、『黄檗蔵』は一千六百一十八部を収録しており(『嘉興蔵』の翻刻)、その他の排印本『弘教蔵』、『卍字蔵』、『卍統蔵』、『大正蔵』も少なからず和刻本に拠って活字印刷された。ここからわかるのは、和刻本の内典・外典は

一万種以上あるはずであり、その中には少なくない数の貴重な新資料が含まれ、まさに開かれるのを待つ學術の宝庫である。

とは言うものの、和刻本の研究は決して活発であるとは言えない。これは和刻本の特殊な性質が原因となっている。和刻本は中国国内の伝本が元となっているものの、明らかな日本の特色を持ち、例えば江戸の刻本は往々にして和訓が附され、それは中国の刻本にはないものである。料紙、装訂、刻風などからも、どれも中国のものとは明らかに差異がある。しかし、和刻本は純粹な日本人の著作、いわゆる「和書」とは明確な区別がある。和刻本は中国の本と日本の著述の中間に位置するのである。中国の学界の多くは日本の特徴があるためこれを取らず、日本の学界は中国の内容が主であることを理由に注意を向けていない。和刻本研究の索漠たる様相は、もしかすると原因はそこにあるのかもしれない。

実際のところ、和刻本のこの「中間属性」は、まさに研究的価値の所在である。近年東アジアの漢籍のまとまった觀念が形成されるに伴い、和刻本漢籍の重要性は日増しに顕著になってきている。深く和刻本について研究することは、日中韓の三ヶ国の文化を認識するのに実際、全て大いに役立つ。和刻本研究が遅れている現状は速やかに改善すべきである。私が思うに、もっとも有効的な方法は、資料のまとめた刊行流布に過ぎるものはない。日本の汲古書院は多くの和刻本を影印しているけれども、五山版、古活字版、仏教の典籍及び和訓の附されていない翻刻本を収録しないので、多くの珍しくて貴重な典籍が選ばれることがなく、遺珠の嘆を免れない。中国国内のいくつかの叢書

もまた部分的に和刻本を収録して、『四部叢刊』の影印する『白氏文集』や『群書治要』のようなものがあるとはいえ、数は非常に限られている。個々に単独で影印されたものは体系をなしていないために探すに不便である。学界は中国の学者の需要に合った和刻本の叢書を切実に必要としている。

これに鑑み、ここ十年間、私は日本に赴き身内を訪ねたり、學術訪問したりする過程で、和刻本の複製と購入にとりわけ気を配っていた。書店で購入し、友人に求め、あるいは公的所蔵などで補い、私人に相談をもちかけ、小さなものが積み重なって、収穫は頗る豊富であった。その中には中国ですでに失われたものや、稀見の文献が乏しくなく、ここに百余種を選んで影印し、この領域の研究を推進する。

以下に筆者は見識の浅陋を顧みず、和刻本の刊行の歴史、底本の源流、學術的価値、收藏の歴史及び研究の展望等の方面について論述を加え、興味のある読者に裨益するものがあればと願う。

一 和刻本の刊行略史

日本の出版文化史上、奈良時代の天平宝字八年（七六四）に生みだされた『無垢淨光陀羅尼經』は、一般的に日本最古の印刷物（銅板もしくは鉛印本とする学者もいる）とされている。こののちの正式な刊印は、『御堂閔白記』に記載されている寛弘六年（一〇〇九）刊行「千部『法華經』」の記録がもっとも古い。承暦四年（一〇八〇）の題記を今に有する『妙法蓮華經』卷二（神谷正太郎蔵、重要文化財）は、この時期に作られたものである。このことから、『開宝蔵』の伝来（入

宋僧の齋然が持ち帰った)に伴い、宋代のはじめに普及し始めた彫版技術は、日本においては平安中期(九八六〜一〇八五)にはすでに完全に手中に収められていたことがわかる。その時に刊刻された仏教の經典は、宋版の仏經が輸入された刺激の下で作られたのである。この他にも興福寺が刊行した「春日版」があり、寛治二年(一〇八八)版『成唯識論述記』が現存している。この後の鎌倉時代中期(一二二一〜一二八六)、貞応二年(一二二三)から嘉祿三年(一二二七)の「嘉祿版」、建長五年(一二五三)に始まった「高野山版」等、刊刻の内容はどれも主に仏經である。仏教の本文は、宋代の伝来した版刻技術を採用しているけれども、その字跡から言えば、奈良平安以来の古写經の影響を受けているようである。

五山版の時代は日本の出版史のもう一つの重要な時期である。いわゆる「五山版」とは、鎌倉時代中期(一二二二〜一二八六)、南北朝(一二三四〜一三九二)から室町時代後期(一五二六〜一五七三)までにおいて、鎌倉五山と京都五山を中心として刊行された版本を指す。この一時期は、仏典の他にさらに外典の刊刻も現れ始めた。その中でも、静嘉堂文庫所蔵『古文尚書孔氏伝』古鈔本に元亨二年(一二三二)の「命工録梓」の跋文があり、刊刻されて世に行われていたかもしれないことを物語っている(「宝治本」『論語集注』、正中版『春秋経伝集解』は、今人は島田翰の作りごととしている。『詩人玉屑』は「正中元年」の題記があるが、刊記ではない)。こののちの正中二年(一二三二)版『寒山詩』は、現存する最古の外典印刷物の実物である。この一時期の出版は宋元版の深い影響を受けている。北条顕時は禪

宗を信奉していたことから、禪籍の刊刻が盛んに風行した。現存するもっとも古い覆宋刊本は、関東の長楽寺の延応元年(一二三九)刊行の『首楞嚴經』(東寺觀智院、日光山「天海蔵」蔵)である。こののち、京都泉湧寺(入宋僧の俊仍創建)は宋本に拠って少なからぬ律部の典籍を刊刻し、例えば寛元四年(一二四六)道玄刊刻の『仏制比丘六物図』(東洋文庫、慶応義塾大学図書館蔵)、宝治二年(一二四八)願行湛海の『梵網經菩薩戒本』、建長二年(一二五二)淨因の『仏説孟蘭盆經疏科分』は、どれも覆宋の傑作である。鎌倉の靈山寺が刊行したものに『孟蘭盆經疏新記』(大東急記念文庫蔵)、『孟蘭盆經疏科分』があり、極楽寺が刊行したものには弘安六年(一二八三)の『黄檗断際禅師』伝心法要』、弘安十年(一二八七)の『伝法正宗記』、『禅門宝訓集』などがある。こののち、宋代の禅宗語録や典籍が大量に刊刻され、東福寺(入宋僧の円爾辨円創建)が正応元年(一二八八)、二年(一二八九)に『応安和尚語録』、『密庵和尚語録』、『虎丘和尚語録』、『破庵和尚語録』、『雪竇和尚語録』を刊行した。こののちの南北朝の時期は五山版の繁栄期であり、そのうち比較的著名なものとして「臨川寺版」および大陸から日本に渡った刻工の「俞良甫版」があるが、ここでは贅述を避ける。

五山版の中にはなかなか相当な数の外典が含まれている。川瀬一馬の調査によると、そのうち経部十四種、すなわち『古文尚書』、『毛詩鄭箋』、『春秋経伝集解』、『論語集解』(正平本)、『論語』(天文本)、『音注孟子』、『大学章句』、『大広益会玉篇』、『増修互注礼部韻略』、『韻鏡』、『重編改正四声全形等子』、『古今韻会举要』、『重編詳備碎金』、『魁本

対相四言雜字』。史部は六種、すなわち『立齋先生標題解音注音釈十八史略』、『歷代帝王紹運図』、『歷代帝王編年互見之図』、『歷代序略』、『唐才子伝』、『分類合璧国像句解君臣故事』。子部は十三種、すなわち『冷齋夜話』、『重新典校附音増注蒙求』、『新板大字附音釈文千字文注』、『四体千字文書法』、『増広事吟料詩韻集大成』、『韻府群玉』、『聯新事備詩学大成』、『新編排韻増広事類氏族大全』、『莊子虜齋口義』、『新刊名方類証医書大全』、『新刊勿聽子俗解八十一難経』、『察病指南』。集部は四十五種、すなわち『寒山詩』、『杜工部文集』(『杜工部年譜』を含む)、『集千家分類杜工部詩』、『集千家注分類杜工部詩』、『五百家注音弁昌黎先生文集』、『新刊五百家注昌黎先生聯句集』、『新刊注音唐柳先生文集』、『新板増広附音釈文胡曾詩注』、『鍾津文集』、『王状元集百家注分類東坡先生詩』、『山谷詩集注』、『山谷黄先生大全詩注』、『須溪先生評点簡齋詩集』、『誠齋集』、『名公妙選陸放翁詩集』、『北磻全集』(詩集、文集、外集、語録)、『藏叟摘稿』、『雪岑和尚統集』、『碧山堂集』、『白雲詩集』、『廬山外集』、『趙子昂詩集』、『范德機詩集』、『澹居稿』、『揭曼碩詩集』、『蒲室集』、『増補新編翰林珠玉』、『雪廬稿』、『新芳陸天錫雜詩妙選稿全集』、『全室外集』、『増唐唐賢三体詩法』、『諸家集注唐詩三体家法』、『唐賢三体家法詩』、『唐朝四賢精詩』、『石門洪覚範天厨禁臠』、『江湖風月集』、『精選唐宋千家聯珠詩格』、『中州集』、『皇元風雅』、『金玉編』、『澹遊集』、『魁本大字諸儒箋解古文真宝』、『雅頌正音』、『詩人玉屑』、『詩法源流』。また、川瀬氏は『雪窖集』一種を補っているが、これは朝鮮の金尚憲の詩集であるので、ここには含めていない。

以上、全七十九種は、その底本の多くが宋元版もしくは明初刊本で

あり、非常に高い学術的価値を備えている。

室町末期から近世初期(一五九六〜一六四三)までは、古活字版の時代である。この時期に豊臣秀吉は朝鮮に出兵し、大量の銅活字を奪い帰り、後陽成天皇に献上した。文禄二年(一五九三)に銅活字を採用して『古文孝経』を印行したが、実物は現存していない。後に木活字を用いて『錦繡段』等十二種を印行し、これがいわゆる「慶長敕版」である。この後、徳川家康が三要元佶に命じ京都円光寺で刊行させた『孔子家語』があり、これが「伏見版」(もしくは「円光寺版」)の発端となっている。家康が駿府に退隠した後、林羅山などに命じて銅活字で刊行させた『大蔵一覽』、『群書治要』は、「駿河版」である。この後、直江兼続が要法寺に命じて刊行させた『増補六臣注文選』は、一般に「直江版」と呼ばれている。後水尾天皇が元和七年(一六二一)に木活字で印行した『皇朝類苑』は、いわゆる「元和敕版」である。川瀬一馬『増訂古活字版の研究』(八木書店、一九六七年)に拠れば、彼が閲覧した漢籍の古活字版の印本(医書、仏書を除く)七百余部を挙げてゐる。そのうちの経部は十八種、すなわち『周易』、『周易伝義』、『尚書』、『毛詩』、『礼記』、『春秋経伝集解』、『古文孝経』、『孝経大義』、『論語』、『孟子』、『大学章句』、『中庸章句』、『中庸集略』、『説文解字篆韻譜』、『増広龍龕手鑑』、『韻鏡』、『古今韻会举要』、『多識篇』。史部は十二種、すなわち『史記』、『前漢書』、『後漢書』、『立齋先生標題解注音訳十八史略』、『古今歴代十九史略通考』、『貞観政要』、『君臣図像』、『列仙伝』、『唐才子伝』、『帝鑑図説』、『孔子通紀』、『開元天寶遺事』。子部は三十四種、すなわち『標題句解孔子家語』、『孔子家語』、『近

思録集解』、『小学集成』、『小学集注大全』、『晦庵先生語録類要』、『真西山心経正経』、『北溪先生性理字義』、『六韜』、『黄石公三略』、『三略集解』、『七書』、『施氏七書講義』、『司馬法集解』、『殘儀兵的』、『祥刑要覽』、『棠陰比事』、『邵康節先生心易梅花數』、『冷齋夜話』、『新刊鶴林玉露』、『群書治要』、『皇朝類苑』、『標題徐狀元補注蒙求』、『新編古今事文類聚』、『新編排韻増広事類氏族大全』、『纂図附音増広古字千字文』、『剪刀新話句解』、『新編剪刀余話』、『列子虜齋口義』、『句解南華真經』、『莊子虜齋口義』、『老子経』、『老子虜齋口義』、『太上感應篇経伝』。集部は十二種、すなわち『新刊五百家注音弁昌黎先生文集』、『白氏文集』、『長恨歌伝』、『新板増広附音釈文胡曾詩』、『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』、『山谷詩集注』、『白雲詩集』、『陸象山全集』、『増補六臣注文選』、『新編江湖風月集略注』、『諸儒注解古文真宝前集』、『魁本大字諸儒箋解古文真宝後集』。川瀬氏の著書中に挙げられている『篋篋内伝金烏玉兔集』、『新増鷹鶴方』、『増広会通韻府群玉』は、日本・朝鮮人によって編集されているため、ここでは数に入れていない。この他に、古活字版の中には多くの仏典（『叡山版』、『高野版』など）や医書を含むが、ここでは例として挙げる。

五山版と比較して、古活字本の来源はやや複雑である。日本に伝わる古鈔本によって翻印したものには、『古文尚書』、『毛詩鄭箋』、『礼記鄭注』、『古文孝経』等がある。朝鮮本によって翻印したものには、『龍龕手鑑』、『十八史略』、『君臣図像』、『孔子家語』等がある。五山版によって翻印したものには、『唐才子伝』、『冷齋夜話』、『白雲詩集』等がある。また宋本によって翻印したものには、直江版『文選』などがある。

ある。

江戸時代（一六〇三〜一八六七）は日本の出版史上の繁栄の時期である。大まかに三つの段階に分けることができる。

徳川家康が文教を奨励し、朱子学者であった林羅山を幕府の儒官として任用したため、外典の刊刻が主流となり始めた。江戸前期（一六四四〜一七〇三）に刊行された書籍の中には、経部に『四書集注大全』、『五経大全』、『四書輯釈通義大成』等、史部に『伊洛淵源録』、『資治通鑑綱目』、『史記評林』、『漢書評林』、子部に『性理大全』、『朱子語類』、『周子全書』、『張子全書』、『伝習録』等があり、集部には『三体詩』、『古文真宝』、『聯珠詩格』等があった。仏経の刊刻については、思溪藏を翻印した『天海藏』及び万暦の径山藏を翻刻した『鐵眼版一切経』（あるいは『黄檗版一切経』という）がもっとも著名であり、仏経の普及を推進した。前者の擺印した活字が今も寛永寺に残っており、後者の版木が黄檗山万福寺に現存している。

江戸中期（一七〇四〜一七六三）は、漢学隆盛の時代である。経学においては、荻生徂徠が程朱理学を排斥し、先秦の經典中から本義を追求することを提唱したために、『詩経』、『周礼』、『儀礼』等の経書古注の出版の盛行が作り出された。太宰春台校刻の『古文孝経孔氏伝』、根本遜志の『論語集解義疏』、山井鼎の『七経孟子考文』は、どれも中国の学界に大きな反響を生み出した。史学では、幕府の『本朝通鑑』及び水戸藩の『大日本史』の編纂によって、和刻本史書の出版が推進された。『宋書』、『南齊書』、『梁書』、『陳書』等の書籍は、全て和刻本がある。このほかに、地志では『大明一統志』、法律では『大明律』、

『大唐六典』等の書籍の校訂と出版がある。集部の書では、古文辞派の影響で、宋詩から次第に唐詩の別集及び選本の刊行に転向してゆき、『韋蘇州集』、『唐王右丞詩集』、『賈浪仙長江集』及び『唐詩選』、『唐詩正声』、『唐詩品彙』等の書籍が出版された。

江戸後期（一七六四～一人二九）と江戸末期（一八三〇～一八六七）で注意すべきは、「官版」と「藩版」の出版である。いわゆる「官版」とは、江戸昌平坂学問所が校訂刊行した典籍を指し、寛政十一年から慶応三年まで、すべて一百九十九種を刊行した。およそ経部四十六種、史部三十一種、子部七十種、集部五十二種がある。細目は『官版書籍解題略』、『官版書目』に詳しく、それらの書の底本は比較的優れており、また往々にして諸家の校讎を経ているため、価値は頗る高い。「藩版」とは地方の諸藩が刊刻・出版した書籍を指す。天保十三年（一八四二）、幕府は諸藩に出版奨励政策を発し、藩版の刊行を促進した。細目は『諸藩蔵版書目筆記』、『藩版一覽稿』等が参考になる。個人の出版としては、林述斎の『佚存叢書』がもっとも有名である。寛政十一年（一七九九）から文化七年（一八一〇）に木活字本で刊行され、中国の佚書十六種が収められている。書名は歐陽修（司馬光とすべきである）「日本刀歌」「徐福行時書未焚、逸『書』百篇今尚存（徐福行く時 書未だ焚かざれば、逸『書』百篇 今尚お存す）」の詩句から取られている。この書は海外佚書の叢刻の気風を開き、その影響は計り知れない。

二 和刻本の底本の源流

和刻本の主要な刊行の歴史は先述の通りであるが、その中国の淵源はいかがであろうか。ここでは本叢刊所収の資料を中心に、その底本の源流について略述する。

（一）古鈔本

日本所蔵の中国の古籍の中で、古鈔本は非常に貴重な一類である。隋唐代に遣唐使や求法僧の頻繁な往来によって、大量の唐代の写本（部分的に唐末の印本を含む）が持ち帰られた。保存されているものは極めて少ないものの、伝鈔本は相当な数がある。阿部隆一「本邦現存漢籍古写本類所在略目録」中には、かなりの部分が唐代の写本の伝鈔本に属するものがある。もっとも典型的なものは『白氏文集』の旧鈔本であろうが、南禅寺本から出ており、その当時白居易はまだ在世であったために、極めて貴重である。これらの写本は宋代の刊本との差異は往々にして大きく、写本時代と刊本時代の文献が異なることを体現している。ある意味、その重要性は敦煌の写本と同列に見なし得よう。正にこのことから、清末以降、日本に赴いて訪書した有識の士たちは、往々にして日本に蔵されている古鈔本を極めて高く評価し、苦勞して採し求めた。この点は楊守敬、羅振玉においてもっとも突出している。本叢刊で古鈔本に由来するものは七種、すなわち

『古文孝経孔氏伝』、弘安本より出で、原本の所在は不詳。

『御注孝経』、開元御注本、三条西実隆写本より出で、底本は現在、

日本皇室の御物である。

『正平版論語集解』、日蔵古鈔本は百通近く、底本はほとんど唐鈔を源とする。

『論語義疏』、底本は日蔵旧鈔本である。

『玉篇残卷三種』、底本は神宮文庫、高山寺等所蔵の古鈔本である。

『旧注蒙求』、底本は亀田長興（一七五二〜一八二六）個人蔵の写本であり、古写本を以って校訂している。

『遊仙窟鈔』、古鈔本を源とする。

(二) 宋元刊本

日本は平安中期以来、入宋、入元の僧侶が非常に多く、大量の宋元版が彼らによって伝来した。また、宋の商人が貿易する時も書籍を交易する者が往々おり、この経路によって日本に伝来したものも少なくなかった。この他にも、宋元の移民も書籍を携持して日本に入り、和刻本の底本となった。

本叢刊が収録する宋元（遼・金を含む）版に由来するものは六十余部あり、以下にその例を挙げよう。

『尚書正義』、南宋越州八行本、底本は、足利学校遺迹図書館現蔵。

『春秋経伝集解』、覆宋興国軍学（湖北武昌）本、静嘉堂文庫蔵宋本。

『孝経』、覆北宋天聖明道間刊本、底本は、宮内庁書陵部現蔵。

『纂図附音増広古注千字文』、この本は宋の諱を避けており、底本は宋本に違いない。

『歷代帝王紹運図』、この本は宋の幼帝で終わっており、且つ『事林

広記』を引用しており、底本は元本に違いない。

『歷代帝王編年互見之図』、底本は宋本に由来する。

『唐才子伝』、底本は元本に由来する。

『施氏七書講義』、底本は宋嘉定刊本に由来するのに違いない。

『新雕皇朝類苑』、底本は宋刊もしくはその伝鈔本に違いない。

『鶴林玉露』、底本は宋刊もしくはその伝鈔本に違いない。

『新編群書類要事林広記』、底本は元泰定二年（一三二五）刊本である。

『三宝感応要略録』、底本は遼刊本に由来する。

『釈氏要覽』、底本は宋天聖二年（一〇二四）序刊本に由来する。

『樂邦文類』、底本は宋慶元六年（一一〇〇）序刊本に由来する。

(三) 明清刊本

明清の時には、入明や渡清の人士が持ち帰ったものもあったが、決して主流を占めてはいなかった。主な伝来の方法は、商船貿易によるものだった。これに関しては大庭修『江戸時代における唐船持渡書の研究』の所論が詳しく、参考すべきである。

本叢刊は明清本は三十部（清本四部）を収録する。明刊本は以下に例を挙げる。

『魁本対相四言雜字』、底本は明洪武辛亥金陵王氏勤有書堂刊本。

『神器譜』、底本は明万曆三十年（一六〇二）刊本。

『耕織図』、底本は明天順六年（一四六二）宋宗魯刊本。

『内閣秘伝字府』、底本は明隆慶二年（一五六八）序の刊本。

『片壁草法彙函』、底本は明弘光元年（一六四五）序の刊本。

『新刻草字千家詩』、底本は明崇禎三年（一六三〇）建陽忠慶堂余熙字刻本。

『異端弁正』、底本は嘉靖四年（一五二五）序の刊本。

『聖朝破邪集』、底本は明崇禎十二年（一六三九）刊本。

『新録鄭翰林類校金壁故事』、底本は明万曆集義堂黃宜齋刊本。

清刊本は四部、すなわち

『四書緒言』、底本は康熙二十五年（一六八六）樹德堂刊本。

『浦東桂張珠玉詩集』、底本は康熙十年（一六七二）序の刊本。

『花曆百詠』、底本は康熙五十年（一七一二）序の刊本。

『晚香園梅詩』、底本は康熙十七年（一六七八）序の刊本。

(四) 手跡、稿本

中日の人物の往来、詩文の唱和は、その史料が往々にして日本の細心の保存によって伝えられてきた。その中でも和刻本には手跡、稿本によって刊刻されたものがある。例えば『一帆風』は、入宋の日本僧である南浦紹明（一二三五―一三〇八）が咸淳三年（一二六八）及び四年に帰国した際、虚堂智愚など四十四人が作った送別詩の墨跡の合刊本である。また『石城遺宝』は、日本の积性宗が寺院所蔵の宋元明の禅僧及び日本人の真跡に基づき編纂したもので、どれも貴重な交流の史料であり、往々にして佚篇遺文を保存しており、文献の価値が甚だ高い。

中国の社会変動の際、しばしば手稿を日本の人士に託して保存され

たものがある。本叢刊に収録する二種は、この例に属する。『独庵外集』は明代の名僧道衍（姚広孝）が手稿を日本の僧侶に託して刊刻されたものである。『莽蒼園文彙余』は、会沢安が彰考館所蔵の張斐の手稿（今すでに現存せず）によって排印したもので、張氏が来日して援軍を要請した時の遺存である。

(五) 朝鮮本

日本と朝鮮は隣国であり、人物の往来が絶えず、朝鮮本が日本に伝来することも当然少なくない。和刻本の内には、朝鮮本から出たものもある。具体的には李俊杰『朝鮮時代日本と書籍交流研究』（弘益齋、一九八六年）、柳鐸一『韓国古書籍日本刊行考―朝鮮朝を中心として』（『韓国文学論叢』六・七合併号）を参考するとよい。本叢刊所収の『草書韻会』は底本が朝鮮洪武二十九年（一三九六）刻本である。『標題注疏小学集成』は底本が朝鮮正統刊本である。『須溪先生評点簡齋詩集』は底本が朝鮮嘉靖二十三年（一五五四）刊本である。『文章一貫』は底本が朝鮮銅活字本である。

この他にも挙げるべきものは多くあり、藤本幸夫は「韓国出版と文化」『環日本海講演会記録集二〇〇二―二〇〇七』、鳥取県立図書館、二〇一〇年）の中で、古活字本『新編医学正伝』の底本は朝鮮銅活字本（甲寅字）、寛永古活字本『漢書』の底本は朝鮮銅活字本（甲寅字）、古活字本『君臣図像』の底本は朝鮮中宗二十一年（一五二六）刻本、寛文元年（一六六一）刊本『音注全文春秋括例始末左伝句詁直解』の底本は朝鮮端宗二年（一四五四）錦山刊本、江戸刊本『賢首諸乘法数』

の底本は燕山君六年（一五〇〇）刊本であると指摘している。

三 和刻本の学術価値

和刻本の学術的価値に関する研究は、個別の典籍について検討した論文を除いて、総合的に論ぜられたものとしては主に劉兆祐「論中国古籍日本刊本之価値」（『書目季刊』、一九九四年第四期。また同氏『文献学』所載、三民書局、二〇〇七年）、趙飛鵬「伝播与回流——略論「和刻本」漢籍的淵源価値」（播美月、鄭吉雄編『東亜文献研究資源論集』、学生書局、二〇〇七年）、周振鶴「和刻本漢籍与准漢籍的文化史意義」（『中国典籍与文化』、二〇一二年第一期）等があり、ここでは筆者の熟知するところ及び本叢刊に収録するものによって概括しておく。

（一）逸書の保存

林述斎『佚存叢書』、楊守敬『古逸叢書』が刊行されて以降、日本所蔵漢籍の学術価値が認められ、海外からの訪書者たちは和刻本に対して非常に力を注いだ。しかし「和刻本」に対して全面的に網羅したものは未だ多くは見られない。本叢刊に収録の和刻本逸書及び平伝の典籍は百種余りあり、内訳は経部十二種、史部五種、子部三十四種、集部五十九種であり、洋洋たる大観をなすといえよう。

書籍の底本がすでに散逸してしまい、わずかに和刻本によってのみ保存されているものがあり、極めて貴重である。本叢刊所収書を例としても、取り上げるべきものが頗る多い。例えば江戸刻本『二李唱和集』は底本が京都崇蘭館所蔵の宋本であるが、火災によって焼失して

おり、和刻本が世の中に現存する唯一のテキストとなっている。宋の釈智園『閑居編』五十一卷、目錄一卷は、清代にはまだ存在していたが、趙昱（一六八九〜一七四七）小山堂所蔵宋刊本（『増訂四庫簡明日録標注』著録『中庸子集』）は現在所在が未詳であり、すでに亡佚してしまったに違いない。和刻本は日本元禄七年（一六九四）京都茨城方道刻本があり、現存する最古の版本に属する。南宋の釈宝曇『橘洲文集』十卷は、中国では台湾の国家図書館所蔵の日本江戸時代鈔本残卷（巻七から十まで存し、王韜の旧蔵）のみであり、久しく伝本がなかったことが見てとれ、現存では元禄十一年織田重兵衛刊本をもって最佳本とする。

（二）異本の保存

日本に伝えられた中国の古籍は、往々にして中国と異なる系統の異本がある。この種類の異本は、常に仔細な校勘によってようやく発見することができる。

例えば『御注孝経』は、本叢刊収録のものは開元御注本である。中国に存在する天宝注本と比べてみると、二者の差異は非常に大きい。開元本の巻首の元行沖の序は、天宝本では玄宗の序に改められ、経文もまた多く異同があり、改められたものは十一条あり、増やされたものは十条ある。

また『爾雅注』では、中国国家図書館には宋刻があり、日本には江戸時代の松崎明復の翻刻本（底本は京都崇蘭館所蔵宋本であるが、すでに散佚）があるが、墨釘・挖改の箇所を比べてみると、両者の印刷

は同時期ではないことがわかり、和刻本の底本は中国国家図書館蔵本より古い可能性が高い（蔣鵬翔「宋刻十行本「爾雅注」版本源流考」、『図書館雑誌』、二〇一一年第七期）。これは『爾雅注』の版本の流伝を理解するのに明らかにとても有意義である。

さらに『皇朝類苑』では、中国に伝わっているものは六十三巻本であるが、日本の活字本は七十八巻であり、巻六十三から末巻まで、中国国内本に比べて「談諧戲謔」、「神異幽怪」、「詐妄謬誤」、「安辺禦寇」の四門十六巻分が多く、全て合わせて二百条余りあり、極めて貴重なである。

(三) 古籍の原貌の保存

中国の古籍は重刻を経て、往々、特定の需要によって改められることがあり、元の様子が失われることがある。この点では和刻本がかえって原貌に近いことが多い。

例えば『鶴林玉露』は、中国国内に通行しているものは十六巻本であるが、一方、和刻本は三編十八巻本である。この分集本は中国本土に明初にはまだ存在していたが、それ以降だんだんと失われていった。十八巻本は通行本に比べて四十条多く、文字もまた優れている箇所が多くあり、必ずや羅氏の原本にもっとも近いものであろうし、価値も頗る高い。

また『釈氏要覧』は、『郡齋讀書志』に著録されている宋版三巻本はすでに失われている。別に明刊本があるが、これもまた非常に稀見であり、日本の国立公文書館内閣文庫、アメリカのハーバード大学に

は明万曆十一年（一五八三）刻本を所蔵しているが、どちらも二巻本であり、すでに原貌ではない。日本には南北朝の刊本があり、三巻本であり、この本には「杭州仙林寺雕造」の原刊記を載せており、宋本によって覆刻することが分かる。その後の古活字印本、寛永刻本はさらに五山版に由来するもので、故にその三巻本は明らかに二巻本よりも原貌に近い。

(四) 補遺、校勘に役立つ点

1. 補遺

和刻本は、その内容がもし中国で全て失われていたとしたら、補遺の価値は必然的に頗る高くなる。例えば宋の積大観『物初賸語』二十五巻は、『全宋詩』・『全宋文』はどちらも利用していない。この書は前七巻が詩で、後の十八巻が文であり、補うべきものは非常に多い。宋の積惟清『靈源和尚筆語』は『全宋文』に八十通余りの書信を補うことができる。その中で惟清が恵洪に寄せた書画は、とりわけ貴重であるのに、学界で利用されていない。部分的な内容が失われたものもあり、例えば『開元天寶遺事』所載の王仁裕の序は、中国の伝本にはないものである。

2. 校勘

和刻本は、刊行時期が早くはないけれども、比較的古い伝本が元になっていることがある。清人が正平版『論語』、天文版『論語』等の和刻本の経部の文献を用いて校勘した時すでに多く言及しているため、ここには贅述を避ける。ここでは集部の一例を挙げるに止める。

例えば貞享三年（一六八六）本『和靖先生詩集』は、事实上、北宋本に由来するものであり、校勘すると多くの佳処がある。例えば『詩將』詩の林逋の自注は、中国国内の諸本はいずれも「詩夫子」に作るが、この本だけが「詩天子」に作り（『全宋詩』の校記には漏れている）、日本の文献である『明文抄』所載「琉璃台詩人図」と合い、王昌齡が唐の時代に「詩天子」の呼称を有していたことを実証するために、校勘上の根拠を示している。

（五）出版史の価値

和刻本の中には少なからぬ出版史に関する情報が含まれている。『経籍訪古志』巻二に載せる日本室町時代の覆南宋国子監遞翻五代監本『爾雅』（八行本）は、五代の李鶚が著した刊本として実物の証拠を提供しており、印刷史の専門家がすでに注目している。ここでは、さらに数例を挙げたい。

例えば佚書『二李唱和集』江戸覆宋刊本は、書末に「郷貢進士毛蔚」の一行があり、これは当然本書刊行の際の書手の名であり、宋代において手書きの版に名前を残した者は、この書が最も古いものであり、すなわち版刻史上の佳刻でもある。

和刻本中にある底本の内容の多くは失われていないけれども、中国本土の伝本の刊刻時期や刊行地、風格等の面でもしわずかながら差異があれば、出版史の角度から見ると非常に価値がある。

これは通俗類の書籍において突出している。宋元以降、書賈は出版の利益を求め考えを尽くした。そのため同じ書籍の別本の多さは人を

して驚かせるほどである。例えば明刊『千家詩』は、主に基となったものはすべて謝選二卷本であるが、中国国内では僅かに『新刻草字千家詩』（明観成堂陳君美刻本）、『明解増和千家詩注』（明内府彩絵本）及び民間所蔵の『新刻選注復古千家詩』（万曆間刊本）の数のみが現存し、寥々たるものであると言わざるを得ない。しかしながら和刻本はかえって多種が世に存在し、その底本は中国国内ではすでに失われていたり、罕にしか見られなかったりするものである。『鼎鑄注釈（訓注）解意懸鏡千家詩』、『新訂京本増和釈義魁字千家詩選』、『片璧千家詩草法』（『片璧草法彙函』所収）、『新刻草字千家詩』は、明代の民間における『千家詩』の出版状況を理解するために多くの材料を提供してくれる。

類似的例としてさらに『金壁故事』がある。この本は明代に非常に流行し、『新刻全補評注文豹金壁故事』、『鼎雕燕台校正評釈注解金壁故事』、『新刊徽郡原板校正繪像注釈魁字登雲金壁故事』、『新鑄京板圖像音積金壁故事大成』、『鼎梓校増評積五倫金壁故事大全』等の諸版があり、巻次、冊数の多寡には違いがあるけれども、内容には大した差はない。本叢刊では『新録鄭翰林類校金壁故事』を収録しており、その底本は明万曆集義堂黃直齋刊本より出ており、挿図二十幅余りを有し、現存する諸本の中で刊刻がもっとも精良なものである。

（六）芸術的価値

1. 板刻書法

いわゆる板刻書法とは、古籍刻板を通じて古籍に残っている書法的

価値を持った書跡を指す（祁小春『中国古籍の板刻書法』、東方出版、一九九八年）。古籍の中には刻印の精美なものがあり、それ自体が芸術品である（范景中『書籍之為芸術』参照、『附庸風雅与芸術欣賞』所載、中国美术学院出版社、二〇〇九年）。この点では五山版の禪籍がもっとも突出している。多くの禪僧の手跡は中国本土でほとんど残っていないが、禪籍所載の手書の序跋からその様子を窺い知ることができる。落合博志「墨蹟と五山版 宋元代禪僧等書蹟資料としての五山版の序跋」（『アジア遊学』第一二二号、二〇〇九年五月）は、この問題に対して注目を寄せている。そこに挙げられている二例は日本人の禪籍に附された宋僧の手跡に関するものであるが、本叢刊によれば更に多くの実例を得ることができる。

宋代の儒積の交流は密切であったことから、所収の序跋もまた往々にして儒士が作っていた。五山版『寒山子詩集』所載の陸游、朱熹の跋は、どちらも二人の手跡を元に版を起こしており、大変貴重なものである。日本の江戸時代は、明清の蔵書家の「倭宋」な気風の影響を受けたことで、真跡に迫る書籍を刻印することが少なくなかった。例えば日本の元禄時期に翻刻された『淮海掣音』は、精美な覆刻本である。その依拠した底本は「宋刻の旧本」であり、刊語に「刻字楷正、足為清玩（刻字楷正、清玩を為すに足る）」とあるように、宋人の楷書の謹厳さを見出すことができる。書前には居簡、陸応竜、趙汝回、程公許、周弼等の序があり、どれも墨跡による翻刻である。居簡の墨跡が日本に現在も伝存しているのを除いて、そのほかの人士の書跡は本書によって残っており、十分に貴重である。

2. 版画価値

和刻本の中には挿絵のある書籍が少なくなく、その大部分は刊刻が精美であるため、中国版画研究において非常に価値のあるものである。早期の和刻本の挿絵は、古刊の仏典に多く、それは宋版仏典の挿絵の覆刻である。その中でも延応元年（一二三九）刊行の『首楞嚴經』所載の扉絵の説相図は最古のものである。この他に、寛元二年（一二四六）泉湧寺版の「仏制比丘六物図」、鎌倉末期の「増修禪教施食儀文」及び『金剛般若波羅蜜經』の扉頁の説相図などがある。五山版に刊行された外典の中で挿絵があるものは極めて少なく、一般的に『魁本対相四言雜字』、『分類和璧図像句解君臣故事』二種のみであるとされている。

江戸時代の版画の刊本にも宋刻に由来するものがある。例えば「正徳六年丙申二月吉旦 百万三郎開版」の刊記がある『仏国禪師文殊指南図賛』は佳作である。この書籍の底本は南宋臨安府衆安橋賈官人宅刊本であり、収録する図は五十六幅の多きに達し、南宋版画史上の精品である。この書の宋刊は中国ではすでに失われ（中国国内には僅かに明代覆刊本が現存するが、これも甚だ罕見である）、羅振玉はかつて京都神田家の蔵本（現在は大谷大学図書館蔵）によって影印して『古石庵叢書』初集に収録している。

本叢刊が収録する挿絵のある和刻本の多くは明清刊本覆刻によるものである。例えば先述の『金壁故事』は、その挿絵は頗る精美である。また『浦東崔張珠玉詩集』は、本叢刊所収本は和刻覆清本であり、巻首に版画一幀があり、頗る精良で、まさに清人が成作したに違いない。

董捷『明清刊「西廂記」版画考析』（河北美術出版社、二〇〇六年）は収録が甚だ広いが、この書に論及しない。この他にも、「耕織図」は耕図二十一幅、織図二十四幅を収録し、宋棖壽本の様子に比較的近い。『神器譜』は火器の製造・使用に関する兵書である。全書に図二百幅余りを掲載している。『廬山記』の巻首に「廬山十八賢図賛」十六図が掲載されており、頗る精美で、明の版画の貴重な資料となっている。『新鐫注釈出像皇明千家詩』には図二十八幅があり、これもまた明の版画の精なるものである。

帯図本には中国の伝本がやや少ないものがあり、和刻本はそれを補うはたらきがある。例えば、著名な『天工開物』は、中国国内で一時期流通したものは日本の明和八年刊本の影印本である。また『集雅齋画譜』は覆明万曆刊本であり、これも多くは見られない。さらに『平山堂図志』は、乾隆の原刻本は世に伝えられたものは非常に少ない一方、日本の江戸時期の「官版」は覆刻が極めて精美であり、中国国内の翻刻本よりはるかに勝っている。

（七）書籍史上の価値

和刻本は時に非常に複雑な書籍の伝播状況を反映している。例えば新羅の崔致遠「賢首国師碑伝」（唐大薦福寺故寺主翻經大德法藏和尚伝）は、本叢刊の影印は元禄十二年（一六九九）井上忠兵衛和刻本である。その底本は宋本であり、現在日本京都の高山寺に所蔵されている。末尾に紹興十九年（一一四九）宋僧の義和の題記があり、刻工は「錢塘王玠」であり、典型的な宋刻本である。しかしこの本の特別

なところは、「大安八年壬申歳高麗国大興王寺奉宣雕造 本寂居士梁璋施本鏤板」の刊記を附し、その底本が高麗宣宗九年（一一〇九二）刊本であると分かり、本書に宋と高麗の書籍交流の史料的价值を具有せしめている点にある。そして元禄本の出現によって、最終的にこの書は東アジア三国での刊刻を完成させた。この意味では、たとえ元禄本に少なくない錯誤があるものの、かえって非常に高い書籍史上の価値がある。

和刻本は時に贈り物とされた。徳富蘇峰が一九一七年に中国を訪問した際、『成簣堂叢書』の一部分を中国の文学者に分けて贈呈しているが、そこに影印された元禄本『淮海琴音』はもっとも好評であった（『支那漫遊記』の「半畝園の雅集」）。長沢規矩也が中国に赴いた時もまた、中国にはあまり伝本の多くない和刻本の『二十七松堂文集』、『文章一貫』を友人に贈った（和刻本の該書の解題を参照されたい）。

（八）思想史における価値

和刻本は我々の歴史の認識を豊かにする助けにもなる。本叢刊は社会変動期の遺民たちの著作を収録している。例えば蔡正孫の『聯珠詩格』、真山民の『真山民詩集』、張逢辰の『菊花百詠』、張斐の『莽蒼園文稿余』等である。このような作品を通して、我々は時空を超えて彼らの心の声を新たに感じることができ、歴史認識における高い価値を備えている。

和刻本は日本の出版物である以上、必然的にその国の思想背景を持つ。日本の平安中期はすでに熟達した版刻技術を持っていたとは言っ

ても、外典の刊刻は甚だ遅れていた。もし仏典が信仰を代表し、儒書が知識あるいは修養を代表するならば、日本の出版技術の施行は実のところ複雑な思想文化の背景を含むことになる。平安貴族は仏典の刊刻を許可したけれども、この技術を外典の出版に用いなかったが、もしかするとその時代の貴族が知識を独占的に享受していたことと関係があるのかもしれない。新しい伝播手段としての雕版印刷は、仏典に限られていた。そのうち貴族時代から武家時代に入って、ついに雕版技術は外典の刊刻にも運用できるようになった。このことから、和刻本の外典の出現は、ある角度から言えば、時代の変遷と思想解放の指標として見なせないことはない。五山時代の禅籍の出版、または江戸時代の宋学の著作および唐宋詩字選本の刊行は、どれも時代の風気の烙印を持たないものはなかったため、和刻本もまた思想史における重要な資料なのである。

和刻本の日本の思想界における具体的な影響にも注目すべきである。鴉片戦争の後、中国の知識人は西洋の学術の著作を漢訳する方式を通して、国家を変革する道筋を探し求めた。少なからぬ数の中国で出版された漢文の「西学」書が日本に伝来し、訓点を施されて翻刻出版された。これらの書籍は明治維新以前に啓蒙の作用を起こした。これについては増田渉の『西学東漸と中国事情』（岩波書店、一九七九年）の論述に詳しく、参考になる。

四 中国における和刻本の保存收藏

(一) 和刻本の早期伝来

和刻本がいつ最も早く中国に伝来したかは考察できない。和刻本の代表的な出版物として、五山版がまず考慮の対象となるであろう。宋僧の蘭溪道隆（一一一三～一二七八）の渡日を始めとして、宋元時代には日中僧侶が絶えずに往来していた。道隆について言えば、その著作は宋の景定三年（一二六二）に門人によって宋にもたらされ、二年后に紹興府で刊行された。木宮泰彦『日華文化交流史』の統計によると、元明代に入華した日本人僧侶は、分かる範囲で三百人余りいる。五山時代に刊行された宋僧の禅宗語録などの典籍は入華の日本僧によってもたらされたと推測しうるのは、当然道理に合うことである。だが残念なことに、一つも現存していない。明代の無逸克勤が来日し、天台の散佚典籍三十部を求めたことがあったが、その結果は知ることができない。

清代に至って、商船貿易の発展とともに和刻本伝来の記載も追いつきとされた。

そのうち、享和十七年（一七三二）に刊刻された太宰純が整理した『古文孝経孔氏伝』は、恐らく今知りうる最も早くに伝来した和刻本である。『知不足齋叢書』覆刻本『古文孝経』には、天明元年の大塩良の跋が載せられ、次のように述べている。「版成而請琴鶴丹治公、令長崎府尹、託海船遺華云。後数年、又聞商客伊孚九、乞長崎購獲『古文孝経』及『七経孟子考文』各五六通而歸。（版成りて琴鶴丹治公に

請い、長崎府尹をして、海船に託し華に遣らしむと云う。後数年、又た聞く商客の伊孚九、乞いて長崎に『古文孝経』及び『七経孟子考文』各おの五六通を購獲して帰る、と。この「琴鶴丹治公」は、当時の沼田藩主の黒田直邦（荻生徂徠の弟子）である。彼が長崎奉行に命じて太宰純の整理本を「海舶」、即ち当時の長崎の唐商に託して中国に贈った（狩野直喜「山井鼎と七経孟子考補遺」では遅くとも享保二十年前にはすでに中国に伝来したとして）。伊孚九は長崎に往来した唐商で、彼が享保十九年十二月に帰国しており、それで大庭脩は『古文孝経』を彼が持ち帰ったのはこの時期であったと論じている（『江戸時代中国典籍流播日本之研究』（杭州大学出版社、一九九八年、日本原書『江戸時代における中国文化受容の研究』、頁四四七）。『古文孝経孔氏伝』は中国に里帰りした後、清国の学者に反響を引き起こし、『知不足齋叢書』、『四庫全書』に前後して収録されたが、具体的には顧永新「日本伝本『古文孝経』回伝中国考」（『北京大学学报』、二〇〇四年第二期）が参考になるので、ここでは贅述しない。

『古文孝経』の伝来について、また唐商の汪鵬もしばしば言及されている（山本巖「汪鵬事蹟考」、『宇都宮大学教育学部紀要』第一部、四十五の一、一九九五年三月）。汪鵬の『袖海編』（また『日本碎語』という）の記載によると、彼もかつて『古文孝経孔氏伝』『七経孟子考文補遺』を購入して学者たちに伝えたことがわかる。乾隆四十一年（一七七六）、鮑廷博（一七二八〜一八一四）は『知不足齋叢書』第一集に編入したが底本は汪鵬から得ており、汪の『古文孝経孔氏伝』の伝播に果たした貢献は頗る大きい。汪鵬はまた和刻本の佚書『論語義

疏』の里帰りにも関わっている。この本は寛延三年（一七五〇）に江戸古学派の代表、荻生徂徠の弟子の根本遜志によって刊行され、その後汪鵬によって乾隆三十六年（一七七一）に長崎から中国に持ち帰られ、浙江の遺書を採録する遺書局総裁の王宣望に献上され、さらに王氏から皇帝に進呈され、『四庫全書』（乾隆五十二年に文淵閣刊行の武英殿本による）の底本になった。乾隆四十年（一七七五）前後、王氏はまた巾箱本として翻刻し、その板本は乾隆四十七年（一七八二）に彼が自殺した後、鮑廷博が入手し、数年後に『知不足齋叢書』第七集に編入された。松浦章「浙江商人汪鵬と日本刻『論語集解義疏』（『関西大学文学論集』四十四の一〜四、一九九五年三月）の所論が大変に詳しいので、参考になる。この本も清国の経学校勘に重要な影響を生み、翟灝・呉騫・盧文弨・阮元などが本書を頗る重要視し、清代以降の経学校勘に不可欠なものになった。

より早く清国に伝来したものに、山井鼎・物観の『七経孟子考文補遺』がある。この書は和刻本の中国古籍籍ではないが、足利学校所蔵の日本古活字本『周易』『礼記』『論語』『孟子』に関わるので、言及するに値する。山井鼎は江戸古学派の代表である荻生徂徠の弟子であり、彼は足利学校所蔵の古鈔本・宋本・古活字本などの経書を用いて『七経孟子考文』を撰し、後に幕府の命を受けた物観によって『補遺』が完成され、享和十六年（一七三一）に刊刻された。本書は徳川吉宗の令によって、長崎唐商を通じて翌年の一月に早くも中国にもたらされた（狩野直喜「山井鼎と『七経孟子考文補遺』」、『支那学文叢』、みすず書房、一九七三年）。この本は後に汪啓淑によって献上され、『四

庫全書』はこれに依拠して収録している。乾嘉時代の学者の翟灝・盧文弨・王鳴盛・洪頤煊・阮元などは、各々この本を利用したことがあり、高い評価を下した。例えば、阮元は「山井鼎所稱宋本、往往与漢、晋古籍及『積文』別本、岳珂諸本合、所稱古本及足利本、以校諸本、竟為唐以前別行之本（山井鼎の稱する所の宋本、往往にして漢、晋の古籍及び『積文』別本、岳珂の諸本と合し、稱する所の古本及び足利本、諸本を校するを以て、竟に唐以前の別行の本と為す）」と言い、足利の活字本が古くに来源する学術的価値を有すことを正確に指摘している（顧永新『七經孟子考文』考述、『北京大學學報』、二〇〇二年第一期）。

尾張本『群書治要』は天明七年（一七八七）に刊行され、間もなく寛政三年（一七九一）の後修本が出た。寛政後修本の伝来については明確な記録が残っている。近藤守重『右文故事』などの資料によると、彼は寛政八年（一七九六）に寛政後修本を唐館に贈ったことが知られる。道光二十七年（一八四七）に中国で刊行された『連筠移叢書』はこの本を底本とするものである。咸豐七年（一八五七）に刊行された『粵雅堂叢書』二十六集は天明本によるものである。民国時代の『四部叢刊』も天明本によって影印した（尾崎康『群書治要』とその現存本）、『斯道文庫論集』第二十五輯、一九九一年三月参照）。本書の輸出について、『続長崎実録』に多く記載があり、例えば、文化十四年（一八一七）に『群書治要』十三部、文政六・七・八年にはそれぞれ一部が輸出されたとあり、需要が頗る多かつた。

林述斎の『佚存叢書』も早くから中国に伝来した。『通航一覽統輯』

（第二巻）の記載によると、該書の前編・後編は享和元年（一八〇一）に中土に伝来し、全て八部ある。その後の文化二年（一八〇五）、文政七年（一八二四）にも輸入されたことがある。阮元は入手した後、七種を選出して『宛委別藏』（『擘經室外集』卷二著録）に収録し、鮑廷博もその中の『五行大義』を選び『知不足齋叢書』二十六集に収録した。

また、かなり有名な例は『正平版論語』の鈔本である。錢曾（一六二九～一七〇一）『讀書敏求記』にいう。

此書乃遼海蕭公諱応宮監軍朝鮮時所得、甲午（一六五四）初夏、予以重價購之於公之仍孫、不啻獲一珍珠船也。筆画奇古、似六朝初唐人隸書碑版、居然東国旧鈔。行間所注字、中華罕有識之者。洵為書庫中奇本。卷末二行云、堺浦道祐居士重新命工鏤梓、正平甲辰五月吉日謹志。未知正平是朝鮮何時年号、俟統後考之。

（この書乃ち遼海蕭公、諱は応宮、朝鮮に監軍する時に得る所なり。甲午の初夏、予は重價を以て之を公の仍孫に購ひ、啻に一珍珠船を獲るのみならざるなり。筆画奇古、六朝初唐人の隸書の碑版に似、居然として東国の旧鈔なり。行間に注する所の字、中華罕に之を識るもの有り。洵に書庫の中の奇本と為す。卷末二行に云わく、堺浦道祐居士重新工に命じて鏤梓せしむ、正平甲辰五月吉日謹みて志す、と。未だ正平は是れ朝鮮何時の年号なるかを知らず、続けて後に之を考するを俟つ。）

現代の学者の研究によると、この本は室町中期の『正平版論語』の鈔本であり、その底本は初刻ではなく、覆刻の双跋本である（高橋智

『室町時代古鈔本『論語集解』の研究』、汲古書院、一九九八年)。銭氏は清初の蔵書の大家であるが、彼でさえ日本鈔本を朝鮮鈔本に間違えており、当時の蔵書家たちの日本書に暗かったことが窺われる。この本は和刻本の鈔本であっても、和刻本の中国伝来の歴史において重要視すべきである。この本は後に黄丕烈(一七六三―一八二五)に帰し、友人の翁広平がようやく正平は日本の年号であるとの事実を指摘した。この本は後に陸心源の蔵書の舶載に伴って東伝し、今は静嘉堂文庫に保存されている。錢曾の所蔵の日本鈔本は朝鮮の旧蔵であり、後に中国に伝来し、また日本に戻ったことは、確かに書籍交流史上の一奇事である。

上述の資料はよく研究者に引用されているが、毛氏汲古閣影鈔本『正平版論語』はあまり知られていない。この本は『十硯山房旧蔵書目録』に「明毛氏汲古閣影鈔日本正平本」と著録されており、今は京都大学文学部(田中慶太郎十硯山房旧蔵)に所蔵されている。全十冊、表紙には先人の墨書題詞があつていう。

此古本也、從日本国唐本影鈔。国初惟述古堂、汲古閣二公有之。錢遵王藏本、已經翻刻之本、世亦不可多得。原本不知歸於何所。此毛子晋藏本、庚申兵火後、予從荒書得之、真奇宝也。惜□□士風蕪□、將來無人物色、則亦与敝紙無異也。

(此れ古本は、日本国の唐本より影鈔す。国初惟だ述古堂、汲古閣の二公のみ之を有す。錢遵王の藏本、已に翻刻を経るの本にして、世に亦た多く得べからず。原本は何所に歸すかを知らず。此の毛子晋の藏本、庚申の兵火の後、予荒書より之を得。真に奇宝なり。惜

しむらくは□□士風の蕪□、將來人の物色する無くんば、則ち亦た敝紙と異なること無からん。)

この鈔本は吉川幸次郎『論語』(上冊、朝日新聞社、一九七五年)に簡単に言及されただけで、先生はこの影鈔本の底本は毛晋の書友の錢曾の藏本であると推測しているが、これは正しい。ここに取り挙げ、注意されることを期待する。この本は毛晋の晩年の影鈔本であり、かつ日中書籍交流史に関わるものであり、極めて貴重である。

(二) 和刻本の清末民国における保存と收藏

清末以降、日本に赴き書籍を訪ねる人が大勢いたため、和刻本も大量に伝来した。ここでは、比較的重要な人物について簡単に述べてみる。

まずは楊守敬(一八三九―一九一五)である。彼は四年間に日本に滞在し、「日游市上、凡板已毀壞者皆購之、不一年遂有三万余卷(日に市上遊び、凡そ板の已に毀壞せらる者皆之を購い、一年ならずして遂に三万余卷有り)。(『日本訪書志録起』)。彼の蔵書のなかには、当然和刻本も少なくなかった。近年影印された『鄰蘇園蔵書目録』によって、彼が蒐集したものの大概を知ることができる。彼の『日本訪書志』には二十五部を著録しており、善本も相当ある。例えば、巻一の冒頭には足利活字本『七経』を載せて楊氏はかくいう。

足利学活字本『七経』、山井鼎所拋以著『七経孟子考文』者。是書印行於日本慶長時、当明万曆年間。其原係拋其国古鈔本、或去其注末虚字、又參校宋本、故其不与宋本合者皆古鈔本也。日本刻経、

始見正平『論語』及翻興國本『左伝』、又有五山本『毛詩鄭箋』、其全印『七経』者自慶長活字本始。余至日本之初物色之、見一経即購存、積四年之久、乃配得全部。蓋活字一時印行雖多、久即罕存、其例皆然。如吾中土蘭雪堂活字本、亦印於明代、今日已成星鳳。山井鼎当我康熙年間、此本已非通行、惟足利侯国大学始有全部、無怪近日之更難遇也。或疑其中凡近宋本諱多缺筆、当是全翻宋本。是不然、蓋其刻字時仿宋本字体摹入、故凡遇宋諱亦一例效之、実不扞宋本。

(足利学活字本『七経』は、山井鼎抛りて以て『七経孟子考文』を著す所の者なり。この書日本の慶長の時に印行し、明の万暦年間に当る。其れ原と其の国の古鈔本に拠るに係り、或いは其の注末の虚字を去り、又た宋本を参校す。故に其の宋本と合わざる者は皆古鈔本なり。日本の刻経、始めて正平『論語』及び翻興國本『左伝』に見え、又た五山本『毛詩鄭箋』有り、其の『七経』を全印するもの、慶長活字本より始まる。余、日本に至るの初め、之を物色し、一経を見れば即ち購存し、積むこと四年の久しくして、乃ち全部を配し得たり。蓋し活字は一時印行多しと雖も、久しければ即ち存すること罕なること、其の例皆然り。吾が中土の蘭雪堂の活字本の如く、亦た明代に印するも、今日已に星鳳と成る。山井鼎は我が康熙年間に当り、此の本已に通行に非ず、惟だ足利侯国の大学に始めて全部有るのみ。近日の更に遇い難きを怪しむ無きなり。或ひと疑う、其の中の凡そ宋本の諱に近くすれば、多く缺筆し、当に是れ全く宋本を翻すべしと。是れ然らず、蓋し其の刻字の時、宋本の字体に仿いて摹入す、故に凡そ宋諱に遇えば亦た一例にして之に效い、實は尽

くは宋本に拠らず。)

楊氏が版本の源流を把握した上で購入したために、その収集が極めて精美であることがわかる。また、彼は和刻本『春秋経伝集解』、『論語集解』、開元注本『孝経』、天宝注本『孝経』、『帝範』、『臣軌』、『唐律疏義』、『莊子南華真経』、『文中子中説』などに対して題跋を書き、彼が和刻本を甚だ重要視していることを知る。楊氏の蔵書は主に国家図書館(北海分館にも一部を所蔵している)、台北故宫博物館、湖北省図書館、湖北省博物館に収蔵されている。今人の趙飛鵬『観海堂蔵書之研究』(漢美図書、一九九一年)の叙述が詳しく、参考にすべきである。

李盛鐸(一八五九〜一九三四)は清末の頃、公使として日本にいた時に、日本の古刊本、古活字本及び江戸刊本を購入し、所蔵の和刻本は量が多く、質もよく、中国蔵書家のなかの第一人者である。『木犀軒蔵書題記書録』によって、その一斑を見ることが出来る。そのうちの貴重なものに、鎌倉時代の古刊本『成唯識論述記』、五山版『春秋経伝集解』(楊守敬旧蔵)、『仏果園悟真覺禪師心要』、『雪峰空和尚外集』、古活字版『周易注』、『春秋経伝集解』、『皇宋類苑』、『新刊鶴林玉露』、江戸刊本『義楚六帖』、『無文印』などの貴重本がある(宿白『北京大学図書館蔵朝鮮・日本版善本書録』参照)。彼の蔵書は北京大学図書館に収蔵され、散佚することがなかったので、頗る貴重である。和刻本は、すべて『北京大学図書館日本版古籍目録』(李玉編、北京大学出版社、一九九五年)に記載されており、検索に極めて便利である。

羅振玉(一八六六〜一九四〇)は日本に滞在した八年の間に和刻本

を購入し、よいものも少なくない。『貞松堂秘本書提要』及び『大雲書庫藏書目錄』によって、その概要をつかむことができる。彼が題跋した和刻本は『草書韻会』、『内閣秘伝字府』、『關邪集』、『独庵外集統稿』、『古文真宝』、などがあり、彼が和刻本の価値をよく認識していたことが分かる。惜しいことに彼の蔵書は残念ながらかなり散佚している。現存本についていえば、それでも貴重本が見られる。そのうち、五山版『独庵外集統稿』は日本では両足院にしかないが、残欠本であり、羅氏の所蔵は伝世最佳の善本である。

清末における和刻本仏教典籍の收藏については、楊仁山（一八三七～一九一一）を代表とすべきである。彼は南条文雄などの日本の友人を通じて大量の和刻本仏典を購入した。金陵刻經処には、和刻本仏經百五十部余りを現蔵し、それは当初に得たすべてではないが、網羅的な収果の豊かさを見るに足る。彼はこれによって一連の典籍を翻刻し（經板の一部はまだ金陵刻經処に残っている）、近代における仏教の流布に深い影響を与えている。そのうち、『浄土古逸十書』は和刻本古逸書の専門分野的叢書の先駆である。このほか、盛宣懷（一八四四～一九一六）は日本に赴いた期間に多くの和刻本を購入し、彼の收藏は実用書を主としたため、善本に乏しいが、部類が揃っており、華東師範大学に現蔵されている。

指摘すべきは、清末の公使館員たちが和刻本の中国伝来において大きな貢献をなしたことである。例えば、『百万塔陀羅尼經』は清の公使館員陳架の收藏によって中国に伝来したものであるが（陳捷「關於日本最早的印刷品百万塔陀羅尼經西伝中国的記錄」、『人物往来与書籍

流転」、中華書局、二〇一二年参照）、残念なことに実物はすでになくなってしまった。陳架は和刻本を数多く購入し、例えば傅雲龍『篋喜廬叢書』に収録された『二李唱和集』は、彼が東京の書肆で購入したものである。惜しむらくは底本はすでに散佚してしまった。もう一人の館員である姚文棟（一八五二～一九二九）は日本から刻本・鈔本を購入し、二つの部屋を埋め尽くすものだったと言われ、購入の多きを見るに足る。彼が残した蔵書簡目（『景憲府君年譜』所収）によると、彼が購入した和刻本の善本には松崎明復影刻の北宋本『爾雅』、日本正平本『論語集解』、天文板『論語』、『一切経音義』などがあり、彼の收藏は経部を主とし、なかには日本刊本の『論語』が十数種にも達し、その重視したものが十分に見てとれる。残念ながら、彼の蔵書も多行方不明である（陳捷『姚文棟在日本的訪書活動』、『人物往来与書籍流転』、中華書局、二〇一二年）。

五 和刻本の中国における翻刻

（一）和刻本版木の伝来と重印

日本は明治維新以来、漢学が衰微したため、伝統の古典籍が重視されず、「故家旧蔵幾於論斤估值（故家の旧蔵は幾ど斤を論ずるに於て估值す）」（楊守敬「日本訪書志縁起」）となり、それゆえ大量の古典籍が中国に舶載されたそのなかには和刻本版木も乏しくなかった。

もし『古逸叢書』を和刻本と見なせば（刻工を基準として）、揚州印刷博物館に現存するその版木は、おそらく中国における和刻本の版木（中国での補刻版を含む）の最も多く保存されているものになるで

あろう。該書は清末の時に板木を用いて印刷され、比較的によく流布しているが、美濃紙を用いて初印された和刻本のすばらしさには及ばない。

尾張家所蔵の『群書治要』の版木の場合は、明治十八年（一八八五）に四十円で書買の慶雲堂に売却され、その売買文書がまだ蓬左文庫に残っている。その版木は後に中国に伝来し、それによって重印できた。故に中国所蔵の該書には中国産の竹紙を用いて印刷されたものがある。また、楊守敬もかつて版木を持ち帰ったことがあり、官版『広韻』、『集韻』、『八史経籍志』の版木がそうだという（福井保『江戸幕府刊行物』所収の「昌平坂学問所官版分類目録」参照）。そのうちの、『八史経籍志』は清の光緒九年（一八八三）の鎮海の張寿榮の印本がある。なお、『備急千金要方』の版木も上海に伝来し、光緒四年（一八七八）長洲麟瑞堂の印本がある。

そのほか、中国で経営を行っていた日本の書店も版木を中国にもたらすことが多かった。岸田吟香（一八三三〜一九〇五）の楽善堂書店はこれに当たる。彼が販売した書籍のなかに、もとの版木を用いて印刷したものが少なくない。『重刻儀礼経伝通解』、『通雅』、『新定松氏儀礼図』、『朱子文語纂編』、『明季遺文』、『清嘉録』などはその例である（陳捷「岸田吟香の楽善堂在中国的図書出版和販売活動」、『人物往来与書籍流転』、中華書局、二〇一二年）。版木を販売した者もある。三木佐助（一八五二〜一九二六）の『玉淵叢話』によると、彼は明治四年（一八七二）から二十年（一八七九）までの間に、『群書治要』、『欽定四経』、『外台秘要』、『東医宝鑑』、『武備志』、『詩緝』、『医宗金鑑』、

『四書匯纂』の版木を中国に売りに行ったという（王宝平『和刻本漢籍初探』、王宝平主編『中国館蔵和刻本漢籍書目』所収、杭州大学出版社、一九九五年、二三・二四頁）。

（二）和刻本の中国翻刻本

もとの板木を挖改して印刷するほかに、清末以来はまた和刻本に基づいて刊行した古典籍がかなりある。陳架の覆刻江戸刊本『二李唱和集』、董康の做宋翻刻活字本『皇朝類苑』、貴池劉氏刊行の『五灯会元』、『玉海堂影宋叢刊』所収、なかには日本の貞治の元号があるので、所拠は五山版である）は有名な例である。今人はこれを「華刻本」と言い、その量はかなりある（王勇「佚存書与華刻本」、『中日文化交流大系・典籍卷』、浙江人民出版社、一九九六年）。ここでは罕見の翻刻本二種を紹介しよう。

一つは光緒四年（一八七八）翻刻の享保十三年（一七二八）刊本『維摩詰経疏会本』である。

享保本は日本の僧侶が宋本『維摩詰経』と宋本の湛然『維摩詰経略疏』を合刻したものである。湛然『略疏』十巻本の完本は宋版の諸大蔵経に収録されておらず、『至元法宝勘同総録』に著録されているが、後に散佚し（民国時代によく趙城金蔵に発見されたことがあるが、頗る残欠がある）、それゆえ天台の僧侶たちは待ち望んでいた。この本の巻頭には倪恩齡の序があり、巻末には陳紫金蓮居士の跋があり、この本の里帰りと刊行の経緯を詳しく記載している。これによると、この本は光緒のはじめに日本僧の香頂によって献呈されたことが分か

る。彼が中国に来て龍泉寺の本然の下で学び、この仏典が中国ではすでに散佚したことを知り、日本に帰ってからこれを得て、師匠に献呈した。倪恩齡の序はこのことを皇侃の『論語義疏』や『越王新義』、『七経孟子考文』の伝来に例え、いたく賛美した。本書の和刻本は現存が少なく、また清刊本の伝存はさらに珍しいものである。中国には上海図書館所蔵の光緒四年本一本しかない。

もう一つは一九二三年、上海の胡光国の弘化四年（一八四七）の『注解章泉澗泉二先生選唐詩』（書題は「胡刻謝注唐詩絶句」）に作り、また無刊年の後印本がある）の覆刻である。

宋の趙蕃・韓流が精選し、謝枋得が注解した『注解章泉澗泉二先生選唐詩』は、中国罕伝のもので（『四庫未収書提要』には記載）、明の弘治刊本の公的収蔵は南京図書館の所蔵の一部のみであり、民間はたまたま遺されている（莫棠旧蔵）。ところが、本書は日本の弘化四年（一八四七）の翻刻本があり（『和刻本漢詩集成』総集篇第二輯影印）、姚文棟が外交官として来日した時に購入し、沈啓運に贈って、ついにこれを基にして覆刻できた。沈啓運の跋には、「是書又久佚海外、中国鮮有知者。向非日本謙庵主人嗜古好学、獲影鈔原本、鏤而行至、姚君何從得而贈余、余亦奚自分饋吾儕、不將終古湮没乎。（是の書又た久しく海外に佚し、中国は鮮なく知る者有り。向し日本の謙庵主人古を嗜み学を好み、影鈔原本を獲り、鏤て行至するに非ざれば、姚君何によって得て余に贈らん、余亦た奚ぞ自ら吾が儕に分け饋らん、將に終古に湮没せんとせざらんや。）」と述べている。また、江寧の呉鳴麒（四首）、沈鼎（一首）が題した詩があり、そこでその本の里帰りと刊

行を大いに褒めた。

上述のように、和刻本は板木の伝来と中国人士の翻刻を通じて、実に頗る大きな影響を及ぼしているため、軽視すべきではない。

六 和刻本研究の展望

和刻本の量は極めて多く、淵源も多岐にわたり、その背景が複雑であるので、全般的な研究を行うことはとりわけ困難である。十数年前に、いち早く和刻本研究の展開を呼び掛けた研究者がいた（王宝平「和刻本漢籍初探」、『中国館蔵和刻本漢籍書目』所収）。今日に至っては、現状がすでに大きく変わり、日本の国文学研究資料館の「和刻本漢籍総合データベース」、奈良大学の「板木閲覧システム」が公開使用されており、また、『江戸時代初期出版年表』（勉誠出版、二〇一一年）や『五山版中国禅籍叢刊』（第一巻、臨川書店、二〇一一年）などの重要な工具書と資料集もすでに出版され、質の高い論文も相次いで発表された。しかしながら、全体から見ると、和刻本の研究はまだ深化と展開が必要があり、ここでは編者の私見を捧げ述べ、より多くの研究者の反響を期待したい。

研究の基礎から見れば、行うべき文献学的な作業がまだ多い。和刻本は利用しうる目録や工具書がすでにいくつかあるにせよ、完備さにはまだまだ程遠い。例えば、仏教典籍では、比較的できのよい『新纂禅籍目録』や『浄土教典籍目録』があるが、いずれも一つの宗派に偏っており、『仏教解説大辞典』の所載は全面的であるが、その情報がやや古く、要求を満たす方法がない。和刻本仏典について言え

ば、改めて目録を編纂する必要がある、その作業量は極めて大きい。『和刻本漢籍分類目録』には所蔵先を記載しておらず、「全国漢籍データベース」が検索を提供しているが、掲載の所蔵機関はたかだか八十余りであり、収録漏れが甚だ多く、更なる補充の必要がある。これらの基礎の上に、和刻本漢籍総合目録が完成されんことを期待している。

和刻本史目録の編纂も目前に迫っている。和刻本の出版時期を把握するには、当然書籍の形態によって判断することができ、関連する書目の記載による必要もある。『日本書目大成』（古典研究会編）や『江戸時代書林出版書籍目録』（慶応義塾大学斯道文庫編）、『享保以後大阪出版書籍目録』（大阪図書出版業組合編）、『享保以後江戸出版書目』（樋口秀雄編）、『享保以後板元別書籍目録』（坂本宗子編）、などが、和刻本に関する部分をまとめて編輯されておれば、和刻本の流伝の研究に役立つに違いない。

幾つかの和刻本の解題や書誌学的な研究も系統的に紹介するに値する。これらの書籍のなかには、もとより『経籍訪古志』のような漢文の書籍もあるが、『活版経籍考』、『右文故事』、『正斎書籍考』のような日本語で書かれたものも多くあり、専門の研究者によって翻訳される必要がある。書籍商に関する資料も頗る重要であり、この方面には例えば『増訂慶長以来書賈集覧』（井上雄和編、坂本宗子増補修訂）、『徳川時代出版者出版物集覧』（矢島玄亮著）、『京阪書籍商史』（蒔田稻城著）、『江戸書籍商史』（上里春生著）などがあるが、一般の中国の研究者は利用できないため、改めて編訳する必要がある。さらに、和刻本には往々に印が押されており、蔵書印に関する知識も軽視できない。

私は「日本蔵書印索引稿」（拙著『域外漢籍叢考』所収）を編輯したことがあるが、数量がまだまだ少なく、この方面の作業は明らかに継続する必要がある。

和刻本の伝本は極めて複雑であり、その中でも江戸時代の刻本が最も複雑であるので、実物に対する調査を強化する必要がある。ある学者が『古文真宝』を研究して、二百種近くの版本を購入したが、どれも重複しなかったことは（林望『書誌学の回廊』所収の「古文真宝なる顔つき」）、この問題をとってもよく説明している。私もかつて『真山民詩集』を八部購入したことがあるが、一つも重複した版本がなく、江戸時代の刻本の豊富さの一斑が覗える。和刻本の序跋は概ね書買によって加えられ、この点は諸本を比較しないと分からない。例えば、王勃の『釈迦如来成道記』の道誠註本は、寛文本と無刊記本の二種があるが、後者には序文があるけれども、前者には載せておらず、本文が同版であるので、序文は書買が別本によって補配し、寛文本の底本に元来有していたものでないことが分かる。類似する例に『鶴林玉露』があり、その活字本には序文が無いが、江戸の刻本には序文が増補されており、序文のみによって版本を判別すれば、当然誤りやすい。

調査を通じてその底本を見出せる和刻本がある。例えば、『魁本諸儒箋解古文真宝』前後集は中国国内に僅か数部しか存在していないが、和刻本は極めて多く、その来源に関する研究は従前より薄弱である。私の調査によると、和刻本は基本的に成書がやや遅い元刊本系統に由来していると認められ、私は本叢刊の解題に新たに元末明初の刊本二部を示すことで、本書の研究を推進したと信じている。和刻本の来源

が多様であるため、朝鮮半島の伝本も調査の範囲に入れるのが最もよい。また、底本がまだ見つからない和刻本がある。唐詩選集『又玄集』を例にとると、私は国立公文書館内閣文庫所蔵の該書を全て調査したが、校読の痕跡が見当たらず、その底本が結局のところ存在するのか佚亡したのか、さらなる発見が期待されている。また、仏典版本の調査も非常に薄弱である。いくつかの仏典善本が往々にして寺院や仏教系大学に収蔵されているが、調査がなかなか困難で、我々はこの作業に着手して進める研究者の出現を期待している。

学術研究というものは、前人の基礎の上に推進するものであり、それゆえ、先行研究を重視することが必要である。和刻本の研究も同じである。和刻本研究の専著と言えば、川瀬一馬の『日本書誌学の研究（増訂版）』、『続日本書誌学の研究』、『五山版の研究』、『増補古活字版の研究』は無論参照すべきものである。長沢規矩也の和刻本に関する著作も数多く、漢籍解題シリーズ（『長沢規矩也著作集』第十巻所収）の如きも参考に値する。そのほか、『斯道文庫論集』や『漢籍・整理と研究』、『和漢比較文学研究』などの雑誌に掲載されている成果も注目に値する。日本の学者は書誌学において業績が著しく、例えば阿部隆一『中国訪書志』や山城喜憲「河上公章句『老子道德経』の研究―慶長古活字版を基礎とした本文系統の考索」及び近年出版された住吉朋彦『中世日本漢学の基礎研究（韻類編）』は、すべて綿密な調査を行った著作であり、頗る参考すべきものである。もしこれらについて系統的に紹介する学者がおれば、必ず学界を裨益すること多大であろう。資料の収集と公刊配布、著作や論文の翻訳のほかに、学術的視野と

研究方法の革新も非常に重要である。近年、中国で盛んに展開されている域外漢籍の研究は、純粋な版本学や中国学の領域をすでに越え、東アジア漢文化という広い視野で問題を仔細に見つめ、考察して解決しようとしている。和刻本の研究もこの新しい学術の脈絡に入れなければならぬ。和刻本は中日の著作を交流連係する紐帯であり、それは中国の典籍の闕佚と不足を補充、訂正しうるものであり、中国古典文明の原生態を回復し、中国文化に対する我々の認識を増進、豊富にするのに役立ち、域外における中国文化の伝播及び変異を考察し日本文明の生成を考察するのにも、重要な意義を有しているのである。

壬辰の冬、南大和園伝習堂にて

*この翻訳はヒロセ国際奨学財団助成を受けた研究成果の一部である。

（立命館大学文学研究科博士課程後期）
（立命館大学・衣笠総合研究機構専門研究員）

